

[原著論文]

善隣協会のモンゴル人留日学生に対する日本語教育について

包 賀喜格図*、**

Zenrin Association's Japanese Education for Mongolian Students in Japan

Hexigetü BAO*

Abstract

The Japanese language education carried out in Japan in the western region of Inner Mongolia can be divided into two stages: the early period (the period of cultural activities of the Zenrin Association) and the later period (the period of the Mengjiang administration). Among them, the Japanese language education of the Zenrin Association can be divided into two parts: Japanese language education for Mongolian students in Japan and Japanese language education in the western Inner Mongolia region. The Zenrin Association was a cultural group that emerged from the guidance of the continental policy and the Manchu-Mongolian policy since the Meiji period in Japan, with the aim of adapting to the urgent needs of Soviet strategy at that time and to cultivate cultural softness for the Mongols. This article examines the Japanese language education of Mongolian students in Japan, and believes that this inspection can restore the situation of Japanese language education at that time and deepen our understanding of the nature and specific content of the cultural activities of the Zenrin Association in the western Inner Mongolia region.

KEY WORDS : Zenrin Association, Japanese Education, Mongolian Students in Japan

* 内蒙古大学
** 九州共立大学

* Inner Mongolia University
** Kyushu Kyoritsu University

1. 善隣協会の政治的な一面と対内モンゴル文化活動事業

善隣協会の成立と発展については、笹目恒雄という人物の貢献が大きかったという事実を踏まえて、戴天義塾、善隣協会という二つの時期に分けられる。戴天義塾は笹目恒雄の「個人的な至情を以て、貧困な草原騎馬民族の中から、優秀な青年を学ばせたい」¹という考えの下で、モンゴル青年の留日を支援する団体で、1925年12月1日にその教育が正式に発足した。その教育内容の中には日本語教育がモンゴル青年たちの日本留学の一環として特に重視されていた。1933年3月、この戴天義塾を運営していた笹目恒雄は出口王仁三郎の縁で知った大嶋豊と図り、林銑十郎、松井石根、山本条太郎、古仁所豊、池田成彬らの援助により、「日蒙協会」を創立した。同年10月、依田四郎が理事長に迎えられたが、まもなく依田四郎の満州国への赴任によって、林銑十郎の推薦で井上璞が理事長に就任。その間、「対外的配慮」により、善隣協会に改称し、1934年1月12日に財団法人として認可された²。

善隣協会の成立の歴史的背景やその過程については、拙文『善隣協会成立の歴史的背景及成立過程詳考』³においてわりと詳しく論じているので、その詳細はここでは繰り返さないことにするが、善隣協会の事業の核心となる内容とその「意義と目的」について、改めて関係文献を利用して説明したいと思う。

『蒙古とはどんな處か』は善隣協会関係文献の中にはとても大事な存在である。なぜなら、この本の著作兼発行者はともに善隣協会で、発行された時間も善隣協会成立直後の1934年1月30日で、つまりこの団体成立してからわずか半月後のことである。この本の結びの「善隣協会の意義と目的」の部分には、団体成立した当初の考えがリアルに記されている。これによって、善隣協会の事業内容とその目標の真義が比較的正確に把握できるのではないかと考えられる。

この結びの内容に入る前に、まず善隣協会の成立に裏に指導と支援をした、当時の陸軍大学校長の林銑十郎中将が戴天義塾成立してまもなく、自宅に訪れてきた笹目恒雄に述べた話を引用しておきたい。「共産革命によって、帝制ロシアは覆った。その影響下に、最も隣接したハルハ蒙古が独立したが、双方ともに国内整備が完了すれば、思想攻撃は当然四隣に及んでくる。そこで東は、大興安嶺、西は崑崙山脈、その中間がゴビ大砂漠と黄河彎曲地帯のオルドス、この一線を防波

堤として、我々は何かを考える必要があるのではないかと思う。そこで、今、君の手を染めた蒙古は、最も重要な右翼防波堤前線地帯である、と見て、僕は君の動きに眼をつけたということである」⁴。これは戴天義塾時期の話であるが、善隣協会の担うべき政治的な役割が団体成立8、9年前の1925年か1926年にすでに決められていることがうかがえる。「蒙古」は満州事変の発生前、「満州国」の成立前からもうすでに日本、特に日本軍の視野に入って、対口戦略の「防波堤」として想定されているのである。

この「防波堤」の話の延長線にあったのが『蒙古とはどんな處か』の結びの「善隣協会の意義と目的」で提起された「藩壁」である。つまり日本は「東洋の盟主」、救われるべき「蒙古」は「東洋の牙城たり、皇国の藩壁たるものである」⁵という設定である。善隣協会は「蒙古民族の蹶起」が「東洋の曙光」の表れと強調し、皇国日本、盟主たる日本は東洋の各弱小民族と「大同団結して、暖かき手を握り合いつつ王道の実現を図ることこそ、其の最大唯一なる念願なのである」⁶と述べている。これは前述した林銑十郎の話の趣旨をそのまま踏襲していると言わざるを得ない。この方針の下で、善隣協会は設立当初から政治的な性質が中心で、ずっと日本政府、日本軍、そして後の興亜院の資金援助と指導および管理下にあった理由も理解できるようになるであろう。

「善隣協会の意義と目的」は次に、善隣協会は「真に蒙古並に蒙古民族を理解し、彼等の心からの良友となって、その蹶起覚醒を促す唯一の具体的運動機関である」⁷と自己規定をしている。またこの「運動」の緊迫さを強調し、「一刻も猶豫すべからざるに至って誕生した」と言って、事業内容を挙げている。次の通りである⁸。

- 内地に於いては東京に本部を、大阪に支部を置き
蒙古事情の紹介宣伝
- 蒙古留学生の指導援助
- 付属研究所並に図書館の経営
- 蒙古に関する調査研究の発表
- 外地に於いては新京に事務所を、蒙古要地に所要の機関を配置し
- 蒙古民族に対する文化宣伝
- 診療所の開設並に巡回診療の実施
- 蒙古人子弟の教育
- 蒙古の産業開発並に通商の促進指導
- 蒙古の資源及び物資の調査
- 日本事情の紹介

内地と外地にわけて、合わせて十の項目を立てて、文化活動の展開を図っているのがわかる。もちろん「蒙古民族の蹶起、東洋平和の確立、皇道の宣揚の三位一体」⁹を文化活動の指導方針にしているが、最初の「比隣諸民族」から中華民国の察哈爾、綏遠両省に居住するモンゴル族に事業対象をしばっているのもわかる。内地の事業の一つとして、二番目に「蒙古留学生の指導援助」が並べられている。この次は、善隣協会はモンゴル人留日学生に対する日本語教育がいかに行われていたのか、その実態を戴天義塾の時期から見ていきたい。

2. 善隣協会のモンゴル族留日学生に対する日本語教育活動

2.1 「戴天義塾」時期の日本語教育

善隣協会の日本語教育活動は「戴天義塾」の時期に遡ることができる。前述したように、善隣協会創始者の一人、笹目恒雄（以下略、笹目）は1925年12月1日、日本横浜でモンゴル留学生の生活を保障し、学習条件を整える「戴天義塾」を設立した。笹目は1924年にモンゴル地区を遊歴中、扎木蘇隆親王夫人を義母と敬い、フルンボイル副都統公署の総務庁長榮安と交友を結び、榮安にフルンボイルの五、六名の留学生を募集したいこと、またその留学にかかる一切の費用は笹目本人が負担することを申し出た。1925年8月に笹目は再びモンゴルを訪れ、11月11日に6名のモンゴル留学生を連れて日本に帰国した。12月1日に「戴天義塾」の授業が始まり、笹目が塾頭を務め、荒木秀雄が塾主事を務めた。教育内容は「まず日本語の専修に力を注ぐ」とし、「日本語は小学校の教科書に基づき、12月はじめから開始し、一年間に完了する目標で、小学校教員であった荒木秀雄君が担当してくれることになった」¹⁰。

1925年末から1930年にかけて、笹目は計30名余りのモンゴル青年を日本に招き、留学させた。日本語学習の効果から言えば、モンゴル留学生の多くが一つ上のレベルの学校に入って勉強できるということは、「戴天義塾」の日本語教育は一定の成果を上げていたと行うことができよう。一部の学生、例えば第一期の学生の哈達と文通は言語学習の進歩が早く、「一年間に中学課程の教科書をほとんど理解してしまった。韓慶徳とサンジン、は、中学2年程度は理解し、まもなく三年程度を読みこなせる」¹¹というレベルまで達していた。特に哈達においては、『哲学概論』のような書籍まで

読解や理解ができていた¹²。このように教育上は一定の成果はあったものの、笹目の「戴天義塾」は本質上、善隣協会の内モンゴルでの文化工作の序幕であり、その「主な目的は日本帝国主義の満蒙侵略政策を貫徹するための親日的な人材を育成することであった」¹³とも指摘されている。

2.2 善隣協会成立後の日本語教育

善隣協会の成立後、「戴天義塾」を継承し、モンゴル留学生の教育工作に当たっていたのは、善隣協会東京本部のモンゴル留学生部であり、1935年3月善隣協会が東京新宿西久保の新所在地に移った後、このモンゴル留学生部は「モンゴル学生部」と「善隣学寮」の二つに分かれ、前者は学生の学業の管理、後者は生活保障の業務を担当した。モンゴル留学生の人数については、モンゴル留学生部の業務に就いていた音尾秀夫の回想によると、1934年に初めて「満州国」出身の10名を受け入れて以来、二回目の1935年には徳王の依頼を受けて10名、3回目の1936年には8名、4回目の1937年には16名、5回目の1938年には23名、6回目の1939年には14名、7回目の1940年には29名と、計110名を受け入れたという¹⁴。なお、1940年以降の人数については分かっていない。これとは反対に、1939年3月に公布された『財団法人善隣協会既設事業概要』の中の「モンゴル学生部」に関連する記述では、1934年5月参謀本部の委託を受けた「満州国」のモンゴル学生10名、同年11月徳王の委託を受けた学生9名、1935年の4名、1936年徳爾瓦高僧およびその他からの委託を受けた8名、1937年には3名がいたとあり¹⁵、双方を照らし合わせると、データの食い違いが大きい。善隣協会関係者の回想の中でも、毎年約20人を受け入れていたと言う者もいれば¹⁶、毎年の合計人数は約100人だったと言う者もいる¹⁷。データには正確性が欠けるが、善隣協会がある一定の規模でモンゴル留学生を募集し、育成していたという歴史的事実は揺るがぬものである。

「これらの学生は全員善隣学寮に入寮し、善隣高等商業学校特設予科に入って勉強した。一年後には希望を基に全国各地の大学や専門学校に進学した」¹⁸。善隣高等商業学校の前身は1935年2月に設立された善隣協会専門学校であり、モンゴル留学生のための特設予科は1936年4月に設立された。1936年7月に公布された『財団法人善隣協会事業概要』において、「予科の設立の目的はモンゴル留学生在上の学校に進学するために必要な事前教育を施すと同時に、将来モンゴルの建設や蒙日親善のリーダーとして必要な人格や見識を

養うことである。現在の学生数は16名である。」¹⁹と述べられている。

善隣協会「モンゴル学生部」のモンゴル留学生に対する育成は、中等教育を終えた留学生を直接善隣高等商業学校の特設予科に入学させ、年齢が低い者については、短期の日本語教育を施した後、日本の小学校または中学校・高等学校に入学させるという方式が取られた²⁰。モンゴル留学生の個人能力に対しては、善隣協会は、例えば中学校・高等学校を卒業した学生でも、物理、化学、数学、英語等の科目では日本の中等教育初級レベルにしか達しておらず、日本語能力について

はほとんどゼロであったと評価をしている。そのため、当時の日本の大学レベルの専門的な学校が有する入学試験基準の下では、モンゴル留学生が一年の準備教育を受けただけで優秀な学校に進学することは非常に難しい。だからといって、一年の日本語基礎教育を受けず、入学準備教育を一年受けただけだと、学生は大学レベルの教材を理解することが難しいだろうと判断していた²¹。

このような認識の下で、善隣高等商業学校のモンゴル留学生特設予科では以下の表のようなカリキュラムが作られた。

表1：カリキュラム表

科目	日本語	英語	数学	物理化学	体操、訓練、武道	
授業時間数	十六	五	八	二	四	合計：三十五

(この表のデータは1936年12月財団法人善隣協会モンゴル学生部の『留日モンゴル学生現況』²²で作成されたものである。)

毎週合計35時間の授業数の中で日本語の授業は16時間と、全体の46%を占めていたことから、善隣協会のモンゴル留学生に対する日本語教育の重視姿勢は一目瞭然である。また、英語、数学、化学等の科目の授業の約半分が日本語で行われ、善隣協会の目標は全ての科目の授業を日本語で行うことだったとすることができる²³。このことから、特設予科の日本語教育は日本語の授業だけに限らず、その他の科目も日本語で行うことが間違いなく、学生の日本語能力の向上に役立っていたことが分かる。

日本語学習の効果への評価としては、「現在学生の日本語能力は、聴解は尋常小学校の三、四年生のレベル、読解と文章を書く能力は五、六年生のレベルである。最も不足しているのは表現能力で、会話能力は日本の五、六歳の子どものレベル、作文能力は尋常小学校の二、三年生のレベルである」²⁴。また、モンゴル留学生は中国語の能力に頼って漢字の混ざる日本語現代文を理解することができ、日本語の中学校高学年のレベルに達しているものの、表現能力の欠如によって、この分野の本当の実力の評価と発揮に影響が出ている。しかしながら、半年前日本に留学してきたばかりの頃言葉が全く通じなかった状態と比べれば、すでに大きな進歩を遂げているという評価もしていた²⁵。

モンゴル学生の学習能力が漢族の学生に及ばないという評価に対し、善隣協会は日本に留学しているモン

ゴル留学生は中国語の勉強以外に日本語と英語も学ばなければならない状況にも関係しており、これらの勉強のプレッシャーこそが、モンゴル学生がより努力して、高い学習の効果を得るための原動力になるのだという認識を持っていた。また、モンゴル学生部は、モンゴル学生の日本語の学習過程において、「日常会話では中国語を頻繁に使用すること」に起因する学習障害を憂慮し、モンゴル人に対する教育をより有効的なものにするために、モンゴル地区の中等学校を現在の善隣協会小学校と同様に、漢民族と満州族が混在するクラス編成を廃止し、純粋なモンゴル人の学校で日本語とモンゴル語の二言語による教育を行うという意見を提起した。これは善隣協会の内モンゴルでの「文化工作」で長年掲揚してきた蒙漢民族矛盾論に由来し、善隣協会やその後の蒙疆政権下でのモンゴル族に対する教育の中で確かに実践された。

善隣協会は学校内でモンゴルの学生への日本語教育を行うだけでなく、モンゴルと日本の学生間の交流の機会やモンゴルの学生が日本社会に触れる機会を増やすことによっても日本語教育の発展を支えた。善隣学寮はモンゴル学生に住居を提供するだけではなく、日本の学生にも開放して、「モンゴルと日本の学生がそれぞれ半数を占め、協会はこのような形で学生達が相互の理解や友情を深め、将来的にはモンゴルと日本間の橋渡し役になることを望んでいた」²⁶。また、モン

ゴル学生部は定期的に「夏季訓練」や懇親会を開催し、「留日モンゴル学生修養会」を結成、このような活動を以て学生達に日本をより身近に感じてもらい、日本を受け入れてもらおうとした。

1936年10月31日、善隣学寮は善隣高等商業学校の講堂にて、「第二回在京モンゴル留学生懇親会」を開催し、65名の学生が出席、林銑十郎等の人物が会場に赴いた。夕食会の席ではモンゴル学生がそれぞれ日本語で「抱負を述べ」、「モンゴルを復興させ、外モンゴルを取り戻したいという願い」を語り、林銑十郎の訓話の中で触れた「日本精神」に対し強い熱意を示した。この場面は善隣協会の日本語教育の成果を表す一方で、モンゴル学生に対する思想教育でも一定の成果を収めたことを物語っていると言えるだろう。

注

- 1) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P2.
- 2) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P2.
- 3) 包賀喜格図、『善隣協会成立の歴史背景及成立過程詳考』、『東アジア歴史文化研究所論文集』(5)、P 75-88、2022年3月.
- 4) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P12.
- 5) 善隣協会編、『蒙古とはどんな處か』、善隣協会発行、1934年1月30日、P65.
- 6) 善隣協会編、『蒙古とはどんな處か』、善隣協会発行、1934年1月30日、P66.
- 7) 善隣協会編、『蒙古とはどんな處か』、善隣協会発行、1934年1月30日、P67.
- 8) 善隣協会編、『蒙古とはどんな處か』、善隣協会発行、1934年1月30日、P67-68.
- 9) 善隣協会編、『蒙古とはどんな處か』、善隣協会発行、1934年1月30日、P68.
- 10) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P12.
- 11) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P15.
- 12) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P15.
- 13) 丁曉傑『关于日本“蒙古浪人”笹目恒雄』『抗日战争研究』、2007年第3期、中国社会科学院近代史研究所、中国抗日战争史学会、2007年、P188.
- 14) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P22.
- 15) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P315.
- 16) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P237.
- 17) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P176.
- 18) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P176.
- 19) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P281.
- 20) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 21) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 22) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 23) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 24) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 25) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P288.
- 26) 善隣協会編、『善隣協会史—内蒙古における文化活動』、日本蒙古協会発行、1981年、P176.

参考文献：

- 包賀喜格図 (2016) 『20世紀前半期内蒙古地区日语教育史研究』内蒙古大学博士論文
 包賀喜格図 (2022) 「善隣協会成立の歴史背景及成立過程詳考」『東アジア歴史文化研究所論文集』5: 75-88
 丁曉傑 (2007) 「关于日本“蒙古浪人”笹目恒雄」『抗日战争研究』3: 188

資料

- 善隣協会 (編) (1981) 『善隣協会史—内蒙古における文化活動』日本蒙古協会発行
 善隣協会 (編) (1934) 『蒙古とはどんな處か』善隣協会発行

Received date 2022年12月26日

Accepted date 2022年12月26日